

# 「ありがとう」と 「かけがえ」を求めて

## 男性ボランティアグループ 「ボランティアいでたち」の活動

### プロローグ

会社を卒業する2年前のことである。私は会社を退職した後の時間をどう過ごすかと考えてみた。会社という賑やかな世界から孤独な世界に入ってしまうのではないかと不安になった。孤独な毎日だけは避けたい。高齢になっても自分を必要とする場合は福祉の世界にあるように思い、先ずホームヘルパー2級の資格を取得することにした。

### ホームヘルパーの講習会への参加

ホームヘルパー（以下「ヘルパー」）の講習会を何処でやっているのか分からなかった私は、横浜市栄区役所（以下「区」）の福祉担当窓口へ行き、これから申し込める講習会を調べた。ヘルパーが何をする仕事か

ということは語句から多少想像できたが、実際はどういう内容か分からない。何事もそうだが、未知の世界への挑戦は不安なものである。私はおそるおそる講習会場に行ってみると、35人の受講生のうち男性はたった4人だけ。その4人の中でも高齢者は私だけで、他は福祉施設等で既に入っている若い人ばかりだった。講師はそんな私の耳元で「男性のヘルパーってあまり仕事はないですよ！」と言う。しかし、会社を退職したらボランティアの中でこれまで培った知識と経験を活かそうと思っていた私にとって、この言葉はあまり気にすることではなかった。

講習の内容は新しいことばかりで、驚愕の連続だった。自宅と会社を往復する毎日、時には外で飲むような会社員生活が40年も続くと、明日へ向かう若者の集団と家族だけしか見えてきていない。講習の中で高



池田 勝敏

男性ボランティアグループ「いでたち」顧問

【いけだ まさとし】1937年、長野県出身。大手電機メーカーを定年退職後、ボランティアいでたちに入会。事務局長を長年経験しその後代表も務めた。その間、横浜市社会福祉協議会評議員等を歴任。現在、IT会社の役員、障害者支援施設の第三者委員、男ボラネットかながわ代表。

齢者や障害者の話が出てくると、「このような世界が他にあったのだ」と気づかされた。世の中の本当の姿を知ることとなった。

### 「ボランティアいでたち」の誕生

ここからは、私が所属している男性によるボランティアグループ「ボランティアいでたち」について書いていきたい。

平成10年1月25日、栄区で初めて男性を対象にしたボランティア講座が開催されることになった。この講座は区の地域福祉課と既存のボランティアグループ連絡会が「栄区福祉保健ボランティア育成・支援実行委員会」（会長大森真由美氏）を立ち上げ、「待ってました！男の底力」をキャッチフレーズにして募集したものであった。

募集枠は40人だったが、締切日を待たずして満席になった。退職してからそろそろ

会員相互の交流を目的に、季節ごとのイベントを開催。写真は暑気払いの際、会場へ向かう途中での一枚



活動しようと思っている人、既に施設で活動しているが基礎から学び直したい人など、様々な思いが集まっていた。

講座は「男のパワーアップ」と題し、「定年を迎えた男性は、余生の時間を如何に有効に活用するかによって、健康で生きがいのある老後が送れるかどうかが決まる。病魔はいつやって来るか分からない。常に医療・保健・福祉の制度を幅広く研究し、利用や援助の方法を習得しておくことが必要」といった内容を、第6回まで毎回テーマを変えて行われた。

最終回が終わり、修了証を渡された時である。「このまま解散するのは惜しい、男だけで会を作れないだろうか」と提案が出された。その時立ち上がったのが初代代表になる宗像普さん（当時76歳）で、賛同者は13人だけであった。賛同者らはその後、名称を「ボランティアいでたち」（以下「いでたち」）

とし、地域への「愛」と仲間同士の「和」を旗印にして平成10年4月1日に発足した。

### いでたちの目的

男性は何かをやるうとする時、先ず組織や規約等を決めることが好きだ。いでたちも御多分にもれず、先ず規約を作ることになった。その目的を見ると「誰もが住み良い地域社会を実現するために、各種のボランティア活動の実践と情報交換及び会員相互の親睦」と謳っている。さらにこの目的を達成するための手段として、次の活動を行うとしている。

1. 地域のボランティア活動を実践する。
  2. 月1回定例会を開催し、会員相互の交流と情報交換を行い活動の推進を図る。
  3. 福祉関係団体やボランティア団体と交流、情報交換を行う。
  4. 会員相互の親睦を深めるために必要な行事を行う。
  5. その他、目的達成のための活動を行う。
- 簡素な条項の中で、ボランティアもするが同じ比重で会員相互の親睦も重要としていること、会社生活を終えたサラリーマンが地域社会へ溶け込むための交流の場になろうとすることが強調されている。

### 会員への情報の伝達

私がいでたちに入会したのは創立から3

年になろうとする平成13年1月で、ホームヘルパー講習を卒業した翌日だった。

入会後しばらく経ったある日、自宅のポストに、ボランティア要員を至急募集したい旨が書かれたいでたちのチラシを見つけました。それは栄区内に散らばるいでたち会員30人の家を、代表が自ら回って戸別配布したものだ。受け取った時、頭が下がるとともに私の心が動いた。「情報の伝達をもっと容易にできないだろうか」と。

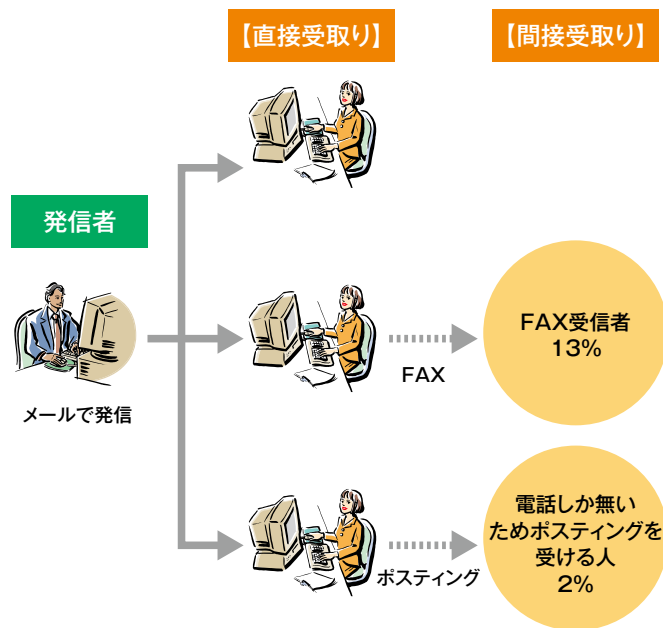
会員の実態を調べてみるとメールができる人は30%と少なく、残りはFAXや電話だけの人であった。そこで、いでたちの中でパソコンが得意な会員の協力を得て、組織的に情報伝達が容易にできる体制を構築した（図表1）。

情報伝達の発信は、先ずメールで送信する。メールを受けた人はプリントアウトし、決められた人にFAX又はポスティングを行うというものである。

一方では会員を対象とするパソコン教室を開き、メールのできない人に呼びかけた。初めはやれない、やらないと頑なに拒んでいた人たちも、始めてみると人が変わったように「こんな便利なものはない」と異口同音に言う。この活動が組織内のメール人口を押し上げた大きな要因となった。今ではメール人口が85%まで上昇し、FAXは13%、ポスティングは2%しかない。

このシステムは、現在もいでたち活動の活性化に大きく寄与している。

図表1 いでたちの情報伝達方



いでたちの組織構成

現在の組織は7つのチームで構成され、それぞれ正副リーダーを置いている。各チームでボランティア要員が必要になった時は、会員に呼びかけ、手を上げた人にお願ひする。ボランティア活動は原則「できる時にできる範囲で」をモットーとしている。7つのチームには次のようなものがある。

【暮らしを支えるチーム】

高齢者・障害者宅等の庭木の手入れ、家具の小修繕等、年間では40〜50件で延べ人員250人が活動している。

【家具の転倒防止チーム】

高齢者・障害者宅等の家具の転倒防止工



小・中学生を対象にした福祉教育のサポート。年間5〜6校から依頼を受ける

事と指導。年平均10件程度だが、今後拡大が期待される。

【福祉教育チーム】

小・中学校生徒を対象に福祉授業の支援を行う。車椅子の取り扱い方、視覚障害者の誘導、視覚障害者から生徒にお願いしたい話、高齢者体験実習等、幅が広い。年間5〜6校から依頼があり、延べ人員30人が指導に入り、生徒は約500人が参加する。

【防災ネットチーム】

「横浜栄・防災ボランティアネットワーク」の会員として参加、ボランティアセンター開設訓練などに年間延べ人員70人が参加している。

【視覚障害者支援チーム】

栄区で活動している目の不自由な方の団体「栄区視覚障害者福祉協会」会員20名の事務局等を引き受けて、活動のサポートを行っている。

【広報（パソコン・HP）チーム】

ホームページの管理人として情報を広げる活動をしている。一方では、会員対象のパソコンサロンを毎週金曜日午後に関き、操作・トラブルの相談に乗っている。

【会員相互のふれあいチーム】

春は花見とバーベキュー、夏は暑気払い、冬は忘年会、その間に旅行等を企画する。もう一つの役割として、会員が高齢者又は障害者になった時にサポートを要請したい場合はここで受け付ける。会員のためのサービスチームである。

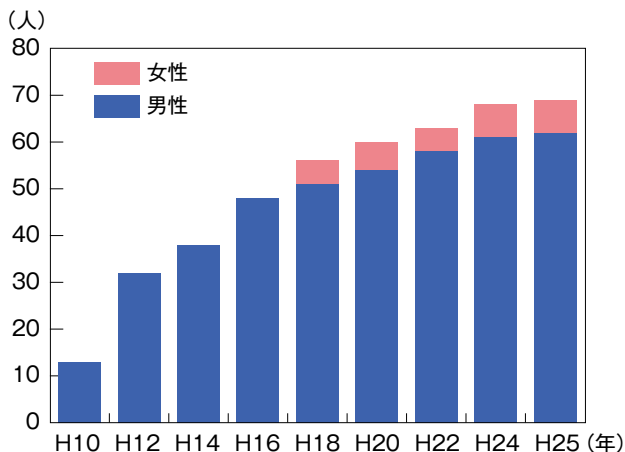
その他、その都度立ち上げるチームでは、次のような活動をしている。

区・栄区社会福祉協議会（以下「社協」）を上げての大きな行事である「障害者ふれあい運動会」や「区民まつり」をはじめ、地域で行われる区・社協・福祉施設等のイベントには、いわゆる「男手」が必要とされる作業がある。たとえばテント張りや撤去作業、イベントブースや机・椅子・看板の設営、交通整理など。いでたちは男性ボランティアとして、それらの要請の都度チームを立ち上げて応援している。ここでも「会社生活で鍛えられた組織を動かす力」が働く。年間10〜12件の活動には延べ100〜120人が参加する。

会員数の推移

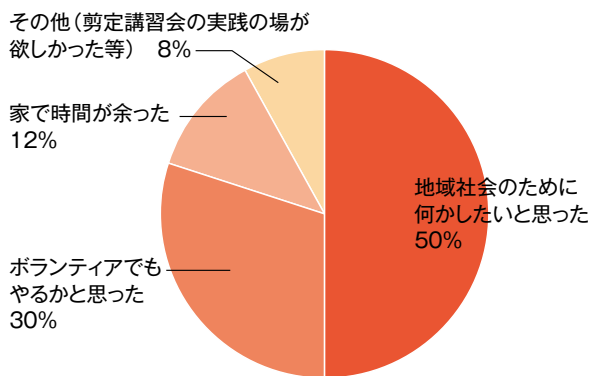
ボランティアの担い手がなかなか集まらない

図表2 「ボランティアいでたち」会員数の推移

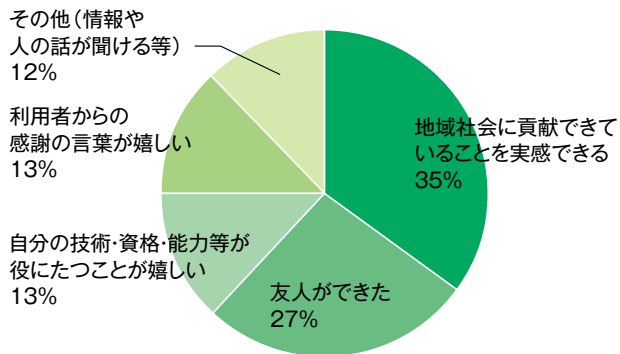


図表3 会員へのアンケート調査結果

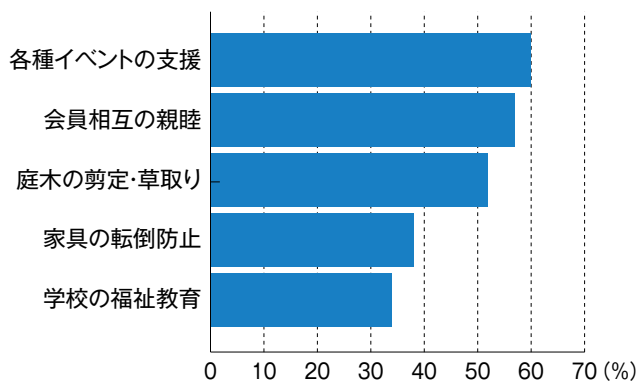
Q ボランティアをやろうとしたきっかけはなんですか？



Q いでたちに入会して良かったことはなんですか？



Q いでたちでどんな活動をしましたか？(複数回答)



地域で行われる区・社協・福祉施設等のイベントは、テントを組み立てる作業などで「男手」が重宝される

アンケート結果で見えるいでたちの実態

ボランティアいでたちの実態は、次のアンケート結果が表している(図表3)。

いという話を、他のボランティアグループの幹部からよく聞く。しかし、いでたちでは会員が毎年増加してきている。中にはお亡くなりになる会員もいるが、それを補っても増加しており、男性62人、さらに賛助会員として女性7人が登録され、計69人となっている(図表2)。

入会は、会員からの紹介や他のボランティア団体からの紹介、区や社協からの紹介、いでたちHPからの応募など多様である。

レベルアップのための「トークタイム」

利用者から「いでたちの人が側に居てくれるだけで安心」、そう言われる集団を目指す

- 1 ボランティアをやろうとしたきっかけは「地域社会のために何かをしたい」というものと「ボランティアでもやるか」との回答が多かった。
- 2 いでたちに入会してよかったことは、やはり「地域社会に貢献できていることを実感できる」ということと「友人ができた」との回答が多かった。
- 3 会員がそれぞれいろいろな活動に参加していることに、このグループの特徴がある。

してきた。そのためには、幅広い知識や技術・技術を持った集団にならないといけない」と提唱。毎月の定例会の後半1時間を「トークタイム」と称し、勉強会を開いている。

講師には会員の中でプロの専門知識を持っている人、資格を有する人、経験の豊富な人が立つが、時には外部から講師を招く。また会員間のディスカッションで意見交換を行ったりしている。

このような活動は平成18年6月から行っており、車椅子の扱い方、心肺蘇生講習等を毎年実施するのは勿論のこと、視覚障害者による「健常者へお願いしたいこと」をテーマとした話、防災減災対策、健康体操、医師による「加齢で注意すべきこと」、薬剤



毎月開催しているトークタイムでは車いすの研修をすることも。「どんな介助がいいんだろうねえ」(写真上)プロの庭師を招いての剪定講習。これを機に、いでの活動を始め始める人も少なくない(写真下)



師による「薬の飲み方」等々あらゆるジャンルをテーマとしている。

### ボランティア品質を重点に

いでたちでは、ボランティアをして、利用者に満足いただくため、ボランティア品質に重点を置いている。ボランティアであっても、美しく仕上げるのが重要である。

利用者から一番多い要求は、庭木の手入れだ。これを受けて毎年行っているのが、社協主催・いでたち共催の「剪定と庭の手入れボランティア講座」である。

近くの公共施設に植えられた11本の大きな木が剪定講習の題材になる。講師はプロの庭師の他、いでたち会員のベテラン数人が助手として参加する。毎年15人から20人

の受講生がここで剪定技術を身につけ、それをきつかけにいでたちで活動を始める人も多い。

一方、家具転倒防止については、一般社団法人日本ハウスマンテナンス協会の講習と実習を受け、試験を受けて合格・認定された者が実務を行うと共に指導もしている。

### 自分自身の中の変化

私はボランティアの世界に入る前、白杖を持った視覚障害者や車椅子の人の近くに寄ることがとても怖かった。近くを通る時は息を止めたり、駅の階段口で姿を見かけると遠巻きに逃げるようにして離れたものだ。今ではこの非礼をお詫びしたいと思っている。ヘルパーの講習会で車椅子などの誘導講習を受けた際、当事者と直接接触することはなく、いでたち入会后、社協の講習会で初めて視覚障害者と会った。この時はとても緊張したことを覚えている。

少し慣れた頃、私は旧友と横浜駅にいた。トイレの前で彼が出てくるのを待っている。その後ろでパタンと音が聞こえた。振り返ると視覚障害者が地面を這って白杖を探しているところだった。誰かが白杖を蹴って行ってしまったら

い。私は駆け寄って白杖を持たせ、「大丈夫ですか？」と声をかけるとその人は「大丈夫です。貴方こそ大丈夫ですか」と言っていて、私を蹴った人と勘違いしているようだった。この一部始終を見ていた友人が言った。「よく声がかげられたネー、尊敬するよ」その言葉に凄い優越感を感じた私に、友人はこう続けた。「俺は助けてあげたいと思う気持ちがあつても、どうしても声が出ないんだ」と。

いでたちに入ってから様々な障害を持つ方や高齢の方に会うことができた。今はもうどんな障害者の方でも親しくお話ができる。誰もが心優しく明るい人ばかりだ。

### ボランティアの喜び

どんな場合でも、心のこもった「ありがとう」の言葉を頂いた時ほど嬉しいものはない。この言葉が、さらにボランティアをやるうとする原動力になる。

以前の私は「ボランティア活動とは、困った人に手を差し伸べてあげるもの」と思っていたが、それよりも大きな意味を持つことに気がついた。それは「ボランティアは自分自身の心を豊かにしてくれる、かけがえない活動である」ということである。私はこれからも「ありがとう」と「かけがえ」を求めて活動を続けていくことであろう。より多くの若い人達も後に続いてほしいと願いつつ。